特別支援教育の基礎理論に関する検討

マリア・モンテッソーリの特別支援教育への視座

岡本明博

１．はじめに

特別支援教育としての知的障害教育の歴史や思想を知ることは、障害のある幼児、児童又は生徒の学校教育に関する歴史、思想において、特別支援教育の基本的な考えがどのように現われてきたのかについて学ぶことでもあり、障害のある子どもたちにどのような考えで教育を行ってきたのかを知ることでもある。

本論では、知的障害の教育についての考え方に大きな変革をもたらした、ジャン・イタール（Jean Marc Gaspard Itard, 1775-1838）とその考えを継承したエドワール・セガン（Séguin Édouard , 1812-1880）、そして、イタールとセガンから大きな影響を受けたマリア・モンテッソーリ（Maria Montessori, 1870−1952）を中心に諸外国における知的障害教育の変遷を巡り、特別支援教育の基礎理論について部分的に言及することとする。特に、モンテッソーリの特別支援教育への視座について述べることとする。なお、本論の記述は文献を参考にしているため文献に使われている用語や表現を原文どおりに用いる。

２．障害のある子どもとの出会い

モンテッソーリは、ローマ大学で医学を学び、女性としてイタリア初の医学博士号を得た後、1897 年、ローマ大学精神科病棟の助手として採用された。モンテッソーリに与えられていた仕事の１つは、ローマ市内にある精神病院の患者の中からローマ大学精神科病棟での治療に適した患者を選び出すことであった。モンテッソーリはこの仕事を通して、市内の精神病院の入院患者の中に多くの知的障害のある子どもたちがいることを知った。知的障害のある子どもたちは、刺激のない劣悪な環境に収容されていた。その子どもたちは精神障害者の基準で扱われていたのであった。

その時期にモンテッソーリがローマ市内の精神病院の１つを訪問したときに経験した出来事についてスタンディング（1975）が『子どもの発見』の中で次のように述べている。

「保護施設のひとつで、不幸せなこどもたちが、まるで牢獄に入れられた囚人たちのように一カ所に集まっているところへ、モンテッソーリはやってきました。その施設では、係の女性が、こども達にあからさまに辟易した様子を見せるのです。モンテッソーリが、なぜそれほどこども達を卑しむのかと尋ねると、女は答えました。『なぜって、食事を済むとすぐ床をはいずりまわってパン屑をあさるんですからね。』部屋を見まわしても、そこにはオモチャ一つありません。ーオモチャどころか、部屋にはなにもなくまったく空っぽなのです。こども達の環境は文字通り無一物で、腕にかかえたり、もてあそぶような物はなに一つありませんでした。そこにいた子ども達のありさまを見ているうちに、モンテッソーリは、こども達が食物よりももっと次元の高い別なものを求めているのだということを知ったのです。それは、いたいけな子ども達が、手を使うことによって獲得できる知性への道だということに気づいたからです。痛ましいこども達は、本能的に、身近にあるものから知性への糸口を求めていたのでした。」

さらに、「障害児たちとの接触が多くなるにつれ―観察したり、状況を検討したり、そして、なんとかできないかと思い―モンテッソーリの考えは、これらのこども達に対する既成概念とは違ったものになっていました。モンテッソーリにとって以前にも増してはっきりしてきたことは、精神薄弱は医学上の問題ではなくて、教育上の問題であるという点でした。やがてモンテッソーリは、ある特殊な教育的な試みによって、精薄児たちの精神状態がずっと良くなり得ると確信するようになりました。」と説明している。

モンテッソーリは、知的障害は医学ではなく教育の問題であるという考えに至り、ある特殊な教育的な取り組みによって、知的障害のある子ども達の発達が促進され得るという考えに至った。このことについて、スタンディング（1975）は、「この考えは、

フランス人医師のジャン・イタール（Jean Itard）やエドワール・セガン（Édouard Séguin）やその他の人の意見と共通していることに、モンテッソーリは気づいたのです。不幸を背負って生まれてきた人間が、人としての尊厳を保ちながら、社会に復帰して、他人の力に頼らなくとも、文明社会の一端を担うことができるようにする、一種の創造行為ーそれが私の心を強くとらえたので、その後、何年にもわたってこの仕事を続けることになりました」モンテッソーリはこう語っています。」と報告している。

この時期にモンテッソーリは、フランス人医師、イタールやセガンの業績を知り、彼らから大きな影響を受けた。彼らの業績がモンテッソーリの研究上の基本をなしている。

モンテッソーリ（2000）は『子どもの家の幼児教育に適用された科学的教育学の方法』《Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all'educazione Infantile nelle Case dei Bambini》の中で「10 年にわたって私は実際に実験を行い、かくも素晴らしい人達の著作を熟読した。彼らは目立たない英雄的行為のもっとも豊かな試みを人類にもたらすことによって、偉人の列に加えられた。私の 10 年にわたる研究もまた、イタールとセガンの 40 年にわたる研究業績につけ加えられえるものである」と述べている。

３．イタールとセガンから得た学び

モンテッソーリがイタールとセガンから得た学びについてスタンディング（1975）が『子どもの発見』の中で詳しく述べている。

「モンテッソーリが、これもやはり障害児の教育問題に生涯を捧げた二人のフランス人医師、ジャン・イタールとエドワール・セガンの業績を知るにいたったのは、心身障害児たちに関心を持ったのがきっかけでした。これによってモンテッソーリの精薄児問題に対する直観的な洞察力は深まったといえます。」、「モンテッソーリは、自分が心服していた、イタールとセガンの業績を徹底的に調べました。フランス革命の頃に活躍したイタールは、聾唖者のための特別な研究をしていた人でした。アヴェロンの森に捨てられていた白痴の少年を教育したことで、彼は一番よく知られているでしょう。その記録は『アヴェロンの野生児（The Care and Education of the Wild Boy Aveyron）』という書物に著されましたが、それはまったく信じられない程に忍耐強い仕事でした。」と説明している。

セガンは、イタールの弟子にあたり、後に障害児のための学校をパリに設立した人物である。この施設でセガンは優れた業績を残したため、その名は一躍有名になった。

セガンについて、スタンディング（1975）は、「セガンは『白痴の精神療法、衛生法ならびに教育』（Traitement Moral, Hygiene et Education des Idiots）の中で、彼の行った指導法を発表しました。これは、パリの学校で障害児と共にすごした十年間の体験をもとにしたものです。モンテッソーリはイタール、セガンの業績を大層高く評価しており、そのことばを借りれば、「イタリア語に訳し、自分の手でこの二人の著述のはじめからおわりまでを書き出し＜セガンの著書だけで 600 頁あった＞、昔印刷が普及する以前にベネディクト会の僧侶がやったようにして、自分自身のための本をそれぞれ作りあげました。わざわざ自分の手で書き上げたのは、二人の著者の精神をも読みとり、ひとつひとつの言葉の重みをはかってみる時間があるのではないかと思ったからです」と述べている。

セガンはその晩年アメリカへ渡り、数多くの障害児施設を設立したのである。

さらにセガンについて、スタンディング（1975）は、「その後、二十年程たってから、その教育法に関する二度目の報告書『白痴と生理学治療』（Idiocy and its Treatment by the Physiological Method）を刊行した。これが英文でアメリカにおいて出版されたのは、1866 年のことでした。モンテッソーリは、この著書について耳にしていたが、長い間、これを手に入れることができませんでした。モンテッソーリは、ロンドンへ行った時、この本をたずねて障害児に関心のある医師や、特殊学校に関係のある医師を一軒ずつ全部訪れたと語っていました。セガンの二番目の著者が郵便で届けられた時、モンテッソーリは、600 頁にわたるセガンのフランス語からイタリア語への翻訳がちょうど終えたところでした。」、「セガンの二番目の著書は、最初の本でとりあげた体験を、理論的に体系化して扱ったものでした。この中でセガンは、個々の児童の研究によって得た基礎に立ち、「生理学的な指導法」ーそれは、生理学と心理学上の現象の分析から得た教育法なのですが―は正常児にも適応されるべきである」と説明している。

このようにモンテッソーリは、イタールとセガン

から知的障害児の教育について多くの学びを得たのである。

４．知的障害のある子どもの教育

モンテッソーリの精神遅滞児への関心はさらに深まっていった。前之園（2005）によると、「精神遅滞児という用語は、1877 年にミラノの精神科医師アンドレア・ヴェルガによって導入された。精神遅滞児とは、頭脳の諸機能が不十分である患者を示し、重度の精神薄弱あるいは知恵遅れとも呼んでいた。この頃、精神科医たちの間では、精神遅滞児を精神病院の入院患者の中から隔離すべきであるとの見解で一致していた。」のである。

精神病院から知的障害児を分離して、医学的・教育的施設に受け入れるという考えが優勢になりつつあり、施設で知的障害児の観察や、個別的で具体的な教育も行えると考えていたのであろう。

モンテッソーリは、知的障害児の教育について研究を深めるために英国とフランスのビセトールとサンペトリエールの教育施設を訪問した。そこでは、フランスの医師たちによる方法が具体的に実施されていた。これらの教育施設では教師たちが生徒の個別研究に基礎をおきながら、その生徒の諸感覚の教育を通して、神経組織を活性化することを目指すセガンの生理学的な指導法を深く学習していることを観察した。

そのときに、モンテッソーリが気づいたことについて、前之園（2005）は、「モンテッソーリは、その方法が形式的な教育的メカニズムにあまりに傾斜しているために、セガンが提示する諸教材による遅滞児の教育の可能性がいまだに達成されていない事実をも知ることとなった。そのことは、モンテッソーリを更なる研究に導くことになる。」と説明している。

モンテッソーリは、1898 年、トリノで開催された教育学会で、社会は遅滞的で特殊な知的障害という特質によって公立学校から利益を得ることのできない子どもたちを救助し教育するために、どのような手段をもなおざりにすべきではないと主張した。
その内容について、前之園（2005）は、「小学校に併設学級が設置され、そこには完全に遅滞児ではないにしても普通学級の教育活動を混乱に陥らせる知的障害を持つ子どもたちが受け入れられるべきだとした。また、重度の障害児を受け入れる医学的・教育的施設が各県の精神病院に併設されるべきだとの提案も行った。さらに新たな特殊教育の教師の教員養成ならびに師範学校で教育学を担当する教師の養成の必要についての問題を提起した。これらの内容は、知的障害児に対して、適切な生活環境が整備され、教育的方法が学問的基礎にもとづいて確立されるならば、知的障害児の教育は実現可能であるとの前提にもとづいていた。」と報告している。

さらに知的障害児の教育について、「モンテッソーリ自身の立場から見るならば、先人たちがこれまでなし得なかった医学と教育学の統合の視点を明確に打ち出した点において画期的なものであった（前之園，2005）」。

モンテッソーリ（1902）は「教育の特殊的方法に関する障害児の分類法」

《Norme per una classificazione dei deficienti in rapporto ai metodi speciali di educazione》において、「従来、精神的遅滞児が個々人としてたとえ学校に入ったにしても、彼らは学校から何らの利益をも得ることはできなかった。学校が精神遅滞児を受け入れる条件が整っていなかったからである。」さらに「教師たちは、発達遅滞の子どもたちに教えるような教育を受けて障害児教育に備えるよう準備されていなかった。教師たちは、それらの子どもたちに対して伝統的な従来の教育方法を用いた。」「その方法は不適切であり、体罰、懲らしめなどが教育方法の主流となっていた。」と説明している。

また、モンテッソーリ（1910）は、著書『教育学的人類学』《Antropologia pedagogia》の中で、「行われるべき改革は、学校と教育学である。すべての子どもたちがその発達において保護されるようにわれわれを導く。その子どもたちの中には、社会生活の環境に対して遅滞により無関心を示す子どもたちもふくまれている。」としている。

さらに、モンテッソーリは、1995 年「社会的貧困と科学の新しい諸方策」《Miserie sociali e nuovi ritrovati della scienza》において知的障害児の教育の基礎、原理について、「精神遅滞児を教育するすばらしい活動がもとづくべき基礎は、次のような原理による。すなわち、彼らの中に存在するところのものを研究し、たとえ最大の可能性を獲得するのに最小の効果しかなくてもすべての能力を活用することである」と述べ、さらにモンテッソーリは、「患者に対する医師・心理学者あるいは精神科医の態度は、科学を愛するのみならず、子どもをも愛するという態

度でなければならない。」と子どもに関わる者への態度についても主張している。

５．知的障害児のための師範学校の創設

前之園（2005）によると、「1900 年に創設された知的障害児のための師範学校の目的は小学校の教師たちが心理的な発達遅滞の様々な形態を知り、個別のケースに適した教育の方法を用いることができるようにすること」であった。

この教育目標の達成のための基礎知識や教育内容は、次のように考えられていた。

＜基礎知識＞
①生物学
②人類学
③解剖学
④生理学
⑤免疫分類学
⑤衛生学
⑥教育学的衛生学など
の基礎知識であった。

＜教育内容＞
①感覚や運動能力テスト
②心理学テスト
③言語の機能障害のテスト
④生育歴カード、生育記録の作成
⑤知的な遅滞児に対する特別の教育方法
（感覚や運動の教育、性格の教育、言語障害の矯正の教育など）
を視野に入れた教育内容であった。

そのカリキュラムには、当時の科学的研究が知的障害児の教育の問題に対して提供できる理論的知識と多様な訓練内容が組み込まれていた。養成コースでの学習には、さまざまな疾患の特徴に関する教育、矯正の方法の適用に関する演習も含まれていた。養成コースは「知的障害児のための師範学校」に併設され、障害の程度の異なる子どもたちが集められている「特殊学級」で行われた。養成コースは理論的・実践的試験をもって修了となった。次の段階の養成コースとして、さらに上級の知識・経験を深め学ぶ学生のための課程が用意されていた。この養成コースでは、知的障害児ならびに神経病児の看護に関する理論的・実践的知識を学ぶことを目標としていた。

モンテッソーリ（1916）は、知的障害児のための師範学校で展開された授業の内容について、『小学校における自己教育』《L’ autoeducazione nelle scuole elementari》の『教育方法の講義要綱』の中で、「知的な教育を始める前に、先ず、子どもたちは知的な教育を受け入れる準備を行う必要がある」と考えていた。それは、子どもたちが身体の健康な状態を維持することを意味していた。それが欠如している場合は、まず身体の健康を回復することが優先的に求められると考えていたのである。障害児のための教育カリキュラムについて教育を始めるまえに、その教育を受け入れるように別の教育によって子どもを準備する必要がある。その教育は、すべての他の教育を行う土台となる最重要な役割をはたすことを目指していた。モンテッソーリは、「それを衛生教育と言いたい。それは知的障害児において、しばしば医学的教育の意味を持っている。ゆえに知的障害児の教育方法は医学的・教育的方法と呼ばれる。」と述べている。

子どもの身体的健康の回復は、衛生教育を通じて達成される。モンテッソーリは「衛生教育は、知的障害児の医学的訓練の意味を持つ。損なわれた諸機能を刺激し活性化させることを目指す治療的な側面が、知的障害の教育の前提となり基本である。」と説明している。

７.おわりに

本論では、知的障害の教育についての考え方に大きな変革をもたらした、イタールとその考えを継承したセガン、そして、イタールとセガンから大きな影響を受けたモンテッソーリを中心に諸外国における知的障害教育の変遷を巡り、特別支援教育の基礎理論について部分的に言及することを試みた。モンテッソーリの特別支援教育への視座を探ることによって、モンテッソーリが障害のある子どもやその教育へ関心を向けることになった経緯や、イタールとセガンから障害児教育の学びを深めたこと、知的障害児教育に携わる教師の養成にも携わっていたことがわかった。そして、子どもに関わる者の子どもを愛する態度が重要であるというモンテッソーリの考えにもふれることができた。知的障害のある子どもへ向けられるモンテッソーリのあたたかいまなざしは、障害のある子どもの尊厳を守る実践のなかにも

みることができる。

今回、モンテッソーリの知的障害児のための教育カリキュラムの詳細については言及することができなかった。これは次の課題としたい。

謝辞

本論に関して、日本モンテッソーリ協会前会長の前之園幸一郎先生の研究から多くの示唆を得ました。心より感謝申し上げます。

文献

E．M．スタンデイング著，クラウス・ルーメル監修，佐藤幸江訳（1975）「モンテソーリの発見」，エンデルレ書店

前之園幸一郎（2005）「マリア・モンテッソーリの障害児教育への視座」青山學院女子短期大學紀要, 59 ，pp．71-96.

M. Montessori（2000）Il Metodo della Pedagogia Scientifica applicato all’educazione Infantile nelle Case dei Bambini, Edizione critica, Edizioni Opera Nazionale

M. Montessori（1902）Norme perunaclassificazione dei deficient in rapport ai metodi speciali di educazione (Rules for a classification of deficient with reference to a special method of education)

M. Montessori（1910）Antropologia pedagogica. Milan: Vallardi, Milano.

M. Montessori（1995）Miserie sociali e nuovi ritrovati della scienza. Vita dell’infanzia, XLIV, 44-9. (Original work published 1898)

M. Montessori（1916）L'autoeducazione nelle scuole elementari, Milano, Garzanti.